

## 形を変えて進化する集落の 営農形態

～喜多方市高郷町東羽賀集落

会津農林事務所  
喜多方農業普及所  
主査 岩淵 幸治



只見川沿いにある旧高郷村東羽賀集落。すぐ近くにJAライスセンター等の施設もありますが、これまでに個別に機械を揃え水稲に取り組んで来ました。この集落の取組を紹介します。

### ○集落営農の新しいしくみづくり

東羽賀集落（農家戸数13戸、農用地面積36ha）では、平成元年に東羽賀集落営農組合（農家戸数10戸）と構成員を同じくする東羽賀農用地利用改善組合（昭和56年設立）を立ち上げ一体的に転作大豆及び委託加工の納豆販売の取り組みをしてきました。

しかし、構成員の高齢化や大豆面積の減少化、制度変更による改善組合の消滅などの現状を踏まえて平成18年6月から集落内で「将来の集落の農業をどうすべきか」について話し合いを進めました。

その結果、既存の組織体制を見直し、集落農業の合理化を進める事となりました。具体的には、東羽賀集落営農組合は転作と切り離し農用地の利用調整・営農等の企画運営等を行う農用地利用改善団体（H18/12認定）として再整備し、一方農作業の実践部隊として農作業受託組合をH18/11に立ち上げました。その後も話し合いは続き、受託組織は東羽賀農作業受託組合としてH19/6に特定農業団体となりました（図）。

### ○H20年の集落での取組み

- ・アスパラガス約90aを新規に導入しました。集落内の労力を活用しながら栽培していきます。

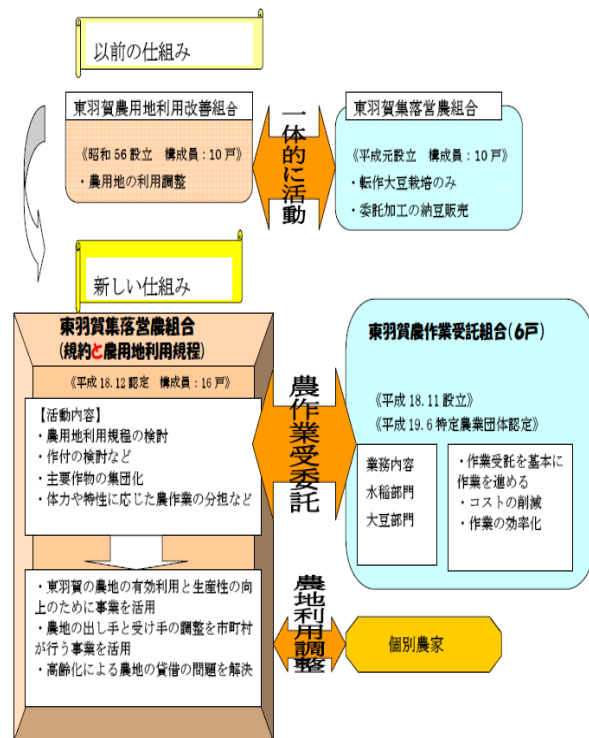
- ・受託組合として水稲で水田経営所得安定対策に加入しました。特定農作業受託も行うことで対策に加入出来ない小規模面積でも収入減少補填を受けることが出来、相互に助け合いながら行っていくこととなります。

- ・水稲直播栽培を0.8ha実施し、水稲の育苗の省力化を試みました。

- ・大豆は、約2ha栽培しています。納豆の委託加工販売は今後も継続して行く予定です。

### ○今後の課題

これからは、2つの組織がそれぞれの目標に向かって活動し、集落内の機械の整理合理化を図りながら、集落と受託組織の信頼関係を構築して受委託や営農の高度化を進めていくことが重要となっています。



アスパラ植え付け

## JA しらかわ稲発酵粗飼料用稲の取組み

～JAしらかわ 本柳宏明～



平成20年度米穀の生産調整実施にあたり、転作作物が定着しないなか水田機能を維持したままでの生産が可能な新規需要米の1つである稲WCSの取組みをした。

当JA管内(西郷村)では、平成19年度より取組しており、既に推進体制は確立されている。今年度から、JA管内の一市一町三村の広範囲に拡大となり、栽培指導・刈取適期(品種・水管理)・供給先・刈取料金・品質・搬送等々と専用機の導入など多くの課題が浮き彫りとなってきた。最も懸念された機械の導入については、畜環機構のリース事業と中央会の支援で導入することが出来ました。

課題解決については作付者全員を対象にした合同講習会・指導会の開催現地圃場の確認・生育状況に合わせた刈取日程表作成・農家への配布や供給先については、県酪連・県との協議を重ね地元酪農家への供給体制もできました。料金については、西郷村・近隣農協と協議し決定しました。

8月27日より刈取作業を開始し、刈取オペレーター1名・ラッピングマシン1名・グラブトラクター1名・補助員2名搬送車2台でのスタートとなりました。

途中、雨天による延期などはありましたが、ほぼ順調に進行、他にJAあぶくま石川・JAあいづへの作業支援も9月25日まで

に終了し、約1ヶ月の稼働となりました。品質等今後も確認しなければならない事はありますが今年は総刈取面積1744a 収穫ロール数1,952個となりました。

今後の課題・方向性としては、

- ①作業効率の向上：○集約化(団地化)・・・圃場が点在し、移動に時間を要する○刈取期間・・・品種、播種時期、直播等
- ②機械の有効活用：○西郷支所で実施・・・試験的に3ha実施、コンバインの構造上の問題・オペレーターの技術等
- ③自給飼料生産の定着化：○配合飼料価格高騰の背景とは別に、転作品目の一つとしての定着
- ④栽培上の研究：○多収品種・・・「ふくひびき」・「ゆめあおば」・「べごのみ」  
○直播・・・コスト低減 ○施肥・・・コスト面
- ⑤国・県・市町村の事業としての継続  
以上の課題に対し次年度以降取組み強化していきたい。

## 稲ワラWCSの取組について

当JAでは今年度 稲WCSの収穫作業が終了した後、9月下旬から約8haの稲ワラWCS作業を実施しました。

稲WCSロールベーラーの稼働機会を増やすために、刈り取り終了後の稲ワラをラッピングロールしサイレージとして家畜の飼料に活用することをはじめました。

使用した酪農家からは、好評で今後大きく期待されるようです。

酪農家との連携を深めながら、稲作農家・酪農家の双方にとってメリットがあるようなものとするよう、収穫や調整の方法・技術を向上させていかなければなりません。作業機械の維持・管理費を賄う上でも有望な活用方法と考えています。

